

# マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモールにおける ナポレオンの帰還——1840年代の詩をめぐる

岡部 杏子

## 1. はじめに

ナポレオン・ボナパルトが、フランス・ロマン主義の作家たちがこぞって作品に登場させた人物であることは広く知られている。例えば、スタンダールは、『赤と黒』の主人公ジュリアン・ソレルを、ナポレオンの『セント＝ヘレナ滞在記』の愛読者とするこゝで、野心に燃える若者として描いている<sup>1</sup>。また、ヴィクトル・ユゴーは、「ヴァンドーム広場の円柱に捧げるオード」を始めとする複数の詩篇のなかで軍人ナポレオンの栄光を讃えている<sup>2</sup>。彼らの他にも、シャトーブリアン、ラマルチヌ、ヴィニー、キネ、バルザックなど、ナポレオンを描いた作家には枚挙に暇がない。これらの作家たちによって描かれたナポレオンの傑出した軍人としての才覚は、いわゆるナポレオン神話の形成に寄与した。実際、ナポレオンはフランス・ロマン主義文学の主題の一つとして数えられているほどである<sup>3</sup>。

デボルド＝ヴァルモールもまた、このように流行したテーマに取り組んでいたがそのことはあまり知られていない。サント＝ブーヴによると、デボルド＝ヴァルモールはワーテルローの戦いの敗北に衝撃を受け、六週間悲しみに暮れて過ごしたというほど、ナポレオンを支持していた<sup>4</sup>。それゆえ、デボルド＝ヴァルモール

<sup>1</sup> Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, Gallimard, 1972, pp. 42-43.

<sup>2</sup> 西川長夫、「ヴィクトル・ユゴーの詩におけるボナパルチスム：十九世紀ナショナリズムと文学」、『Francia』第9号、1965年、pp. 39-56。

<sup>3</sup> Cf. Sylvain Pagé, *Le mythe napoléonien De Las Cases à Victor Hugo*, CNRS Éditions, 2013.

<sup>4</sup> Sainte-Beuve, *The Memoirs of Madame Desbordes-Valmore*, Roberts Brothers, 1873, p. 46. « The truth is that, although entirely ignorant of politics and every thing pertaining thereto, Mme. Valmore's sympathies were liberal and popular, devoted to the oppressed

は、ナポレオンを自分のいくつかの作品に登場させている。例えば、彼女が1833年に発表した小説『画家のアトリエ』においては、ナポレオンが、主人公の叔父である画家コンスタンの模写を欲しがる場面がある<sup>5</sup>。また、詩に目を転じてみると、『画家のアトリエ』の十年後に刊行された『花束と祈り』に収録されている「柳」<sup>6</sup>、および、これと同時期に書かれた「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」<sup>7</sup>というナポレオンを題材にした詩篇がある。これらの二篇が書かれたのは、1840年12月15日に、ナポレオンの遺骸がセント＝ヘレナからフランスに返還された直後にあたる。

本論では、この二篇の詩「柳」と「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」を対象とし、それぞれの詩篇においてデボルド＝ヴァルモールがナポレオンをどのように描いているのかを讀解してゆきたい。それにより、かつてのフランスの皇帝であった者の亡骸が、敵国であったイギリスから返還されるという政治的な出来事をデボルド＝ヴァルモールがどのように捉えているのかを明らかにする。

## 2. 「柳」におけるナポレオンと女性の表象

まず「柳」という詩篇からみてゆこう。この詩篇が執筆された経緯は、1840年12月2日付の夫プロスペル宛の書簡で次のように明かされている。

デュヴェルジェは私にロマンスを一篇作るよう頼んできました。ロッシーニの「オテロ」の柳の素晴らしいアリアに乗せるためのものです。このロマンスはセント＝ヘレナの柳に関するものです<sup>8</sup>。

---

and the vanquished. She was a thorough *patriot* in the sense in which the word was then employed, and had been ill six weeks on account of the disaster at Waterloo. »

<sup>5</sup> Marceline Desbordes-Valmore, *Atelier d'un peintre*, Charpentier, 1833, t. II, pp. 106-107.

<sup>6</sup> *Les Œuvres poétiques de Marceline Desbordes-Valmore*, éd. Marc Bertrand, Presses universitaires de Grenoble, t. II, 1973, pp. 465-466. 本論ではこのエディションを底本とし、以下CE. P.と略記する。

<sup>7</sup> CE.P., t. II, p. 640.

<sup>8</sup> *Lettres de Marceline Desbordes à Prosper Valmore*, éd. Boyer d' Agen, Éditions de la Sirène, 1924, p. 35. « Duverger m'a fait faire une romance, sur l'air admirable de Saule d'Othello par Rossini. Cette romance est sur le Saule de Sainte Hélène [sic] ». またデボルド＝ヴァルモールは同年12月24日付の夫宛の書簡でもこの詩篇について言及してい

デュヴェルジェとは、オペラ＝コミック座の舞台監督であり、デボルド＝ヴァルモールと親交があったテノール歌手アドルフ・ヌリの義父である<sup>9</sup>。また、ロッシーニの「オテロ」とは、シェイクスピアの『オセロー』の翻案であり、1816年に初演されたオペラである<sup>10</sup>。ここでデボルド＝ヴァルモールが記している「柳の素晴らしいアリア」とは、第三幕で、登場人物のデスデモーナによって歌われる「柳の歌」と呼ばれるアリアである。この書簡からわかるとおり、「柳」という詩篇は、すでに存在している音楽に合うような歌詞として執筆されたのである。実際、この詩篇は、六音綴による軽快なリズムが用いられている。そのうえ、「セント＝ヘレナの柳」と強調されるところからわかるのは、ナポレオンを哀悼する詩篇の執筆依頼だった、ということである。というのも、セント＝ヘレナにあるナポレオンの墓所には、二本のしだれ柳が植えられていたからである<sup>11</sup>。これら二本のしだれ柳は、あたかも埋葬されたナポレオンの遺骸を護るかのように植えられていたのである。

以上のような執筆経緯を踏まえて「柳」という詩篇を見てゆこう。

---

る。「『柳』と題したささやかなロマンスをあなたに手紙で送ると約束してくれたデュヴェルジェと私は再会していません。もし彼がカンペヌー氏に宛てた書簡を持ってやって来なければ、幸いなことに私はそれをあなたに送ることができるでしょう。《Je n'ai pas revu Duverger qui m'a promis par lettre de t'envoyer la petite romance du *Saule*. S'il m'en vient une pour M. Campenhout, je serai heureuse de te l'envoyer.》なお、書簡で挙げられているカンペヌー氏とは、フランソワ・ファン・カンペヌー-François Van Campenhout (1779-1848) というブリュッセル生まれのオペラ歌手・音楽家・作曲家であり、ベルギーの国歌「ブラバントの歌」(*La Brabançonne*) を作曲した人物である。1801年から1805年にベルギーのモネ劇場に所属していたことから、この時にデボルド＝ヴァルモールと知古を得た可能性が高いと思われる。

<sup>9</sup> Veillard dit Duverger, Louis-Camille Eugène (1773-1854). *Journal dramatique*の主幹も務めていた。Cf. <https://catalogue.bnf.fr/ark:/12148/cb150169093> [2019年11月30日閲覧]

<sup>10</sup> Cf. 市川裕見子、「オセローは唄う—スタンダードとロッシーニ『オテロ』をめぐる(下)」、「宇都宮大学国際学部研究論集」15号、宇都宮大学国際学部、2003年、pp. 141-146。

<sup>11</sup> ナポレオン・ボナパルトは1821年5月9日に死去したのち、セント＝ヘレナ島のゼラニウムの谷と呼ばれる地に埋葬された。しだれ柳の木については、以下の著作を参照した。Cf. Francesco Antommarchi, *Derniers momens de Napoléon, ou Complément du mémorial de Ste.-Hélène*, t. II, H. Tarlier, 1825, p. 179.

「柳」

セント＝ヘレナの柳よ、  
 もの思う門番のようなおまえよ、  
 不死の捕虜の  
 くびきを神が断ち切る時、  
 どうして、柔らかな草木よ、  
 あの長いつぶやきは  
     憂いに満ちているのか！

三色で武装した、  
 世界の使者たちが、  
 波の上の二十の軍艦が  
     花のなかへ彼を運ぶ時、  
 なぜおまえの緑の枝は  
     ひとつ残らず覆われているのだろうか  
     涙によって。

おお！私の涙を彼に残しておくれ、  
 目をくらませられた哀れな民衆よ、  
 彼の軍のもとにいるがゆえに、おまえは信じるのだろうか  
 彼が今、蘇ると。  
 さあ！死はただのひとつきに過ぎない、  
     そして私は嘆き悲しむ  
     彼の死を！

偉大な将軍が  
 セント＝ヘレナの山腹に、  
 永久に身を横たえた時に、  
 私の葉は日の光を浴びた。

それ以来、私は彼を囲んでいる  
 愛でできた  
 ひとつの冠で。

私は包むだろう。彼の大きな影を  
 無垢な絆で。  
 彼は静かに寂しげに眠る  
 震える私の腕のなかで。  
 そして彼へと向かう、私の喘ぎは  
 みずみずしく、満ちている  
 香で！

なぜなら聖なる憐れみに  
 おとめは大いに涙したから、  
 おとめは膨らませた 私の根を  
 痙攣する岩の下で。  
 そして私の樹液の音によって  
 自分の夢を  
 満たした！

しばしばため息をついていた、  
 彼の魂をなぐさめるために、  
 私はひとりの女の  
 熱烈な「レクイエム」<sup>12</sup>を真似た。  
 そして狭い石の上の

<sup>12</sup> レクイエムという語は、単に葬儀にふさわしい音楽というだけでなく、ユゴーが証言しているように、ナポレオンの遺骸が返還された際の葬列で、楽隊がモーツアルトの「レクイエム」を演奏していたことを踏まえているとも考えられる。Cf. ヴィクトル・ユゴー、『見聞録』、ヴィクトル・ユゴー文学館第九巻、『死刑囚最後の日／見聞録／言行録』、小渕昭夫、稲垣直樹訳、潮出版社、2001年、p. 105。

子どもらしい  
祈りを！

海はうごめき  
渦巻くその波のなかで  
彼の軍隊と転がる太鼓を、  
再現していた。  
私は水で浸していた 彼の記憶を  
栄光の喧騒を  
さらにゆっくりと。

イギリスに奪われた殉教者の  
墓を讃えて  
あの軍人のキリストに向かって  
私は自分の旗を傾けた。  
そして二十年、彼の星は  
私のヴェールを織っている、  
さらに美しく！

愛の経帷子で再び、  
包むことを私は求める  
彼があなたたちに捧げることが望んでいた  
私が熱愛する彼の亡骸を。  
私は望む、彼自身と同じように、  
自分が愛するもののために、  
死ぬことを！

## 2.1 殉教者としてのナポレオン

以上のように、この詩篇は、「柳」に対する「私」の呼びかけで始まっている。この「私」と「柳」の描かれ方に注目して読み進めてゆくと、「私」自身と「柳」

の姿が相関して描かれていることがわかるだろう。例えば、「私の樹液」は私の血液に対応し、「私の根」はそれを送り出す心臓と類比的な関係にある。また、このしなだれた柳の長くて細い葉は、「私」がまとっている「ヴェール」も暗示している。

こうした技法のもと、デボルド=ヴァルモールはナポレオン・ボナパルトをどのように描いているのだろうか。ナポレオンは、「不死の捕虜」（第一連）、「偉大な將軍」（第四連）、「イギリスに奪われた殉教者」（第九連）、「軍人のキリスト」（第九連）といった語で形容されている。これらのうち、「偉大な將軍」については、一大帝国を築き上げたナポレオンの軍人としての栄光を讃えるための、ごく一般的な呼び方である。それゆえ、本論で着目したいのは、「不死の捕虜」、「イギリスに奪われた殉教者」、「軍人のキリスト」の三つの表現である。ひとつめの「不死の捕虜」の「捕虜」とは、ナポレオンが死去した際に、その遺骸がフランスに返還されず、セント=ヘレナに埋葬されたこと、つまりイギリスに奪われたままであったことを示している。実際に、デボルド=ヴァルモールは、ナポレオンの遺骸がパリに戻った晩の様子を伝える書簡で次のようにイギリスへの嫌悪感をあらわにしている。

オステルリッツの太陽は、昨日以来、パリを照らしました。私はあの時、イギリスに盗まれた私たちの皇帝が、今夜、私たちとともに、パリで横たわっていると考えるだけで胸がいっぱいになって言葉が出ません<sup>13</sup>。

このように、デボルド=ヴァルモールは、ナポレオンの遺骸を「イギリスに盗まれた」とイタリックで強調している。二つめの「イギリスに奪われた殉教者」という呼称は、セント=ヘレナに幽閉されたナポレオンが、イギリス総督ハドソン・ローから屈辱的な扱いを受け、その結果、死へと至らしめられたことも含意していると思われる<sup>14</sup>。

<sup>13</sup> *Lettres de Marceline Desbordes à Prosper Valmore, Op. cit.*, p. 40. « Le soleil d'Austerlitz a brillé depuis hier sur Paris. [...] Je ne peux dire ce que je ressens à cette heure, à l'idée que notre empereur volé par l'Angleterre couche cette nuit avec nous dans Paris! » (à son mari, 15 décembre 1840).

<sup>14</sup> イギリス総督ハドソン・ローが、ナポレオンの主治医をフランスに送還し、満足な治療を受けさせなかったという史実がある。Cf. 竹下節子、『ナポレオンと神』、青土社、2016年、

だが、なぜ捕虜となったナポレオンが「不死の」と形容されているのだろうか。また、ナポレオンを「殉教者」とみなしているのはどのような考えに基づいたものなのだろうか。これら二つの問いは、「軍人のキリスト」という表現に注目すれば明確になるだろう。というのも、「不死」も「殉教」も、「キリスト」を想起させる表現だからである。これに加えて、第三連の「彼が今、蘇ると」という「復活」を表す箇所も、十字架の処刑から三日後に復活したキリストを読者に思い起こさせる。このように、デボルド＝ヴァルモールは、ナポレオンをキリストになぞらえ、「殉教者」として描き出している。そして、彼の遺骸の帰還は、かつての栄光を人々の心のうちに呼び覚まし、それによって彼の生が永遠のものになると考えていることがわかるのである。

もちろん、ナポレオンをキリストになぞらえるという例がデボルド＝ヴァルモールのほかにないわけではない。フランク・ポール・ボウマンの指摘によると、ナポレオンを「メシア＝キリスト」になぞらえるという手法は、第一帝政の終わりから第二帝政のはじめに、ロマン主義の作家の作品に散見されるという<sup>15</sup>。なかでも、ナポレオンがキリストとして描かれるという動きは、1840年、すなわち、セント＝ヘレナに埋葬されていたナポレオンの遺骸がイギリスからフランスに引き渡された頃に多く見られるという指摘がなされている<sup>16</sup>。

以上のことからわかるのは次の点である。デボルド＝ヴァルモールは、「柳」のなかで、ナポレオンを栄光に輝いた軍人として描くよりも、不条理にも敵国に囚われた殉教者として描くことに力点を置いている。このように、政治的な事件を宗教的な枠組みのなかで捉えるという点は、デボルド＝ヴァルモールの他の政治詩と共通する、最大の特徴である。

## 2.2 聖母マリアの表象

このように、ナポレオンをキリストになぞらえるという比喩の他に、この詩篇で注目に値するのは、女性の表象である。それは、第六連に出てくる定冠詞つきの「おとめ」である。この「おとめ」は、詩の語り手である「私」がナポレオンの死

p. 70。

<sup>15</sup> Frank Paul Bowman, *Le Christ romantique*, Genève, Droz, 1973, p. 171.

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 172.

に捧げる「憐れみ」を共有する存在として描かれている。これを踏まえて「私」と「おとめ」の関係が描かれている第五連、第六連、第七連を再び見てみたい。

私は包むだろう。彼の大きな影を  
 無垢な絆で。  
 彼は静かに寂しげに眠る  
 震える私の腕のなかで。  
 そして彼へと向かう、私の喘ぎは  
 みずみずしく、満ちている  
 香で！

なぜなら聖なる憐れみに  
 おとめは大いに涙したから、  
 おとめは膨らませた 私の根を  
 痙攣する岩の下で。  
 そして私の樹液の音によって  
 自分の夢を  
 満たした！

しばしばため息をついていた、  
 彼の魂をなぐさめるために、  
 私はひとりの女の  
 熱烈な「レクイエム」を真似た。  
 そして狭い石の上の  
 子どもらしい  
 祈りを！

まず、第五連における「私」の描かれ方、次に、第六連における「おとめ」の描かれ方を読解してゆきたい。第五連で、「私」は静かに眠る「彼（ナポレオン）」を穏やかな様子で腕に抱いている。このような「私」の描かれ方からは、あたかも息

子を抱き、優しく眠りへと誘う母親の姿が想起されるだろう。また、「私」が「彼（ナポレオン）」に抱いている「憐れみ」の念は、「聖なる」と形容されている。したがって、この詩篇の「私」とは、ナポレオンに対して「母性的な愛」を抱くとともに、ある種の「神々しさ」を備えた存在であると言えるだろう。一方、「おとめ」は、息子の死に対して悲嘆にくれる母のような「私」の「憐れみ」に強い共感を寄せ、「私」を力づける存在として描かれている。「私の根」を膨らませ、「私の樹液」を満たす「おとめ」は、「私」の身体に生命力を注ぐ力を有しているのである。

だが、この「おとめ」は具体的にどのような人物を暗示しているのだろうか。この語によって何よりもまず想定されるのは、「聖母マリア」であろう。この詩篇が収められている『花束と祈り』の初版から、「おとめ」*« la vierge »*は小文字で記されており、一般的に聖母マリアを示す際に使用される大文字は使われていない。しかし不定冠詞ではなく定冠詞がこの語につけられていることに鑑みると「おとめ」は「マリア」を指していると解釈することは決して的外れではないだろう<sup>17</sup>。実際、史実に目を転じるならば、こうした解釈を補強する事実がある。それはナポレオンが、自分の誕生日である8月15日と聖母被昇天の祝日が同じであることを理由に、この日をナポレオンの祝日と改称していることである。デボルド＝ヴァルモールが、この史実について言及している書簡は現時点では確認されていない。しかし、後述するが、ナポレオンを描いたもう一篇の詩のタイトルが「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」という、聖母マリアと関連するものであることから、少なくとも、デボルド＝ヴァルモールのなかで、ナポレオンが聖母マリアと関連づけられる人物であることがわかる。さらに、第五連に登場する「私」が、「香」の香りに包まれながら、「静かに寂しげに眠る」彼を「震える私の腕のなか」に抱くという構図や、ナポレオン自身がイエス・キリストになぞらえられている点から次のことが示唆される。すなわち、第六連に現れる「聖なる憐れみ」によって涙を流す「おとめ」は、「聖母マリア」の数あるイメージのなかでも、十字架から降ろされた子イエスを腕に抱くピエタを想起させる。したがって、デボルド＝ヴァルモールは、この詩篇の第七連において、「私」をピエタのマリアに倣わせ、ナポレオンの死を悼ませているのである。

<sup>17</sup> Marceline Desbordes-Valmore, « Le saule », *Bouquets et prières*, Dumont, 1843, p. 115.

民衆を庇護する聖母マリアの存在が現れているという点は、1830年代に執筆されたりヨン暴動詩群、とりわけ「母たちの讃歌」「罰された者たちの讃歌」という二つの詩篇の特徴と一致する。これらの詩篇では、国王軍という権力側の人間によって、社会的弱者である絹織物職工たちの命が無残にも奪われた事件が題材とされている。デボルド＝ヴァルモールは、労働者たちの安らかな死を願い、聖母マリアの加護を求めるというかたちで、彼らを圧殺したルイ＝フィリップの不信心を間接的に批判している<sup>18</sup>。それと同様に、「柳」においても、聖母マリアは重要な役割を果たしているのである。

### 3. 「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」におけるナポレオンと女性の表象

続いて、ナポレオンの帰還が描かれているもう一篇の詩「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」*« Notre-Dame-des-flots »*<sup>19</sup>を読解してゆきたい。この詩篇は、「柳」と同時期に同じく他者から依頼を受けて書かれたものであること、そして執筆に苦戦したことが次の書簡からわかる。

私はカンパヌー氏 [ベルギー国家への賛歌である「ブラバンソヌ」の作者] のために作ることができると思われるロマンスを一篇やっつけています。でも私には休む暇がありません<sup>20</sup>。

その翌日付の書簡でも、デボルド＝ヴァルモールは、次のように詩作の苦労を打ち明けている。「やはり今日もあのあまりにも込み入った水兵たちの歌をあなたに送ることができません。仕事のせいで息がつまりそうです」<sup>21</sup>。このように、デボ

<sup>18</sup> CE.P., t. II, pp. 406-410. リヨン暴動が描かれた「母たちの讃歌」「罰された者たちの讃歌」については以下の論考で分析した。Cf. OKABE Kyôko, « La Poésie engagée de Marceline Desbordes-Valmore : une lecture de deux "Cantiques" », *Études de langue et littérature françaises*, La Société japonaise de langue et littérature françaises, n°109, 2016, pp. 3-20.

<sup>19</sup> CE.P. t. II, pp. 640-641.

<sup>20</sup> *Lettres de Marceline Desbordes à Prosper Valmore, Op. cit.*, p. 45. « Je broie une romance comme je peux à M. Campenhout [l'auteur de la Brabançonne, l'hymne national belge], mais je n'ai pas d'intervalle de repos. » (à son mari, 24 décembre 1840).

<sup>21</sup> *Ibid.*, p. 47. « Décidément, je ne t'envoie pas aujourd'hui le chant trop embrouillé encore

ルド＝ヴァルモールがこの詩篇を非常に苦勞して執筆していたことが伺える。実際に、この詩篇の第二連は、先に挙げた「柳」の第二連とほぼ同じ語句で構成されている。このことは、ナポレオンの帰還という主題で複数の詩篇をつくるのが、デボルド＝ヴァルモールにとって非常に困難であったことを示唆している。また、「柳」とは異なり、この詩篇が『花束と祈り』に収められていないこと、またそれ以後のどの詩集にも収録されることはなかったことも考え合わせると、デボルド＝ヴァルモールにとってこの詩篇は納得のゆく出来栄でなかったと考えられる。

### 3.1 ナポレオンの帰還とステラ・マリス

ところで、タイトルの「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」とは、ノルマンディー地方のル・アーヴルのサン＝タドレスにあるネオ・ゴシック様式の礼拝堂の名称である<sup>22</sup>。デボルド＝ヴァルモールがこのタイトルを選択したのは、ナポレオンの遺骸がセント＝ヘレナから戻る際にル・アーヴルを經由してフランスに着港したことに依ると考えられる。また、この詩篇には「セント＝ヘレナの水兵たち」という副題がつけられている。この「水兵」は、ナポレオンの遺骸を運ぶために乗船している人々を指すものと思われる。この点については、ノートル＝ダム＝デ＝フロが、海上で働く者や旅をする者たちの安全を祈念するための礼拝堂であったことからも理解できる。こうした点をふまえて、具体的に詩篇の内容を考察してゆこう。

「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」

深くてよく響く海よ、  
 彼の名によって静まってください、  
 再び通らせてください、  
 ナポレオンを！

---

des matelots. J'étouffe de travail. » (à son mari, 25 décembre 1840).

<sup>22</sup> Adolphe Laurent Joanne, *Itinéraire général de la France: Normandie*, Hachette, 1866, p. 106.

世界の使者、  
 三色の小舟が  
 波を裂くワシの下で  
 花々のなかへ彼を運んでゆく。

彼の心が降りてゆく場所へ、  
 おお海よ、私たちをお導きください。  
 宇宙は、彼の遺骸の上で  
 ひざまずいて祈ることを望んでいる。

深くてよく響く海よ、  
 彼の名によって静まってください、  
 再び通らせてください、  
 ナポレオンを！

私たちが灯台とみなした  
 ノートル＝ダム＝デ＝フロよ、  
 ミサとみなした、ファンファーレとみなした  
 水夫たちの讃歌よ。

ではさらば、セント＝ヘレナよ  
 今度はひとり泣くがいい、  
 私たちの偉大な將軍は  
 永久におまえを離れる。

深くてよく響く海よ、  
 彼の名によって静まってください、  
 再び通らせてください、  
 ナポレオンを！

さらば、名高き聖女よ  
 おまえが天のそばで支えた  
 彼の光り輝く墓は  
 誰の目にも映りうる。

広大な霊廟から  
 男が征服者として外へ出る、  
 おまえの土台は揺らいだ  
 声を揃えて歌う私たちの別れの歌によって。

深くてよく響く海よ、  
 彼の名によってお静まりください、  
 再び通らせてください、  
 ナポレオンを！

以上のように、この詩篇では、第一連、第四連、第七連、第十連が同じ詩句で、ルフランを形成しており、「柳」と比べると、ロマンスというジャンルにふさわしい、より音楽性の高い一篇となっている。だが、どのような意図でこのような構成になったのだろうか。その手がかりとなるのは、この詩篇を歌詞とした楽譜に記されている以下の文である。「*Et lux perpetua luceat ei; requiem aeternam dona ei, Domine.*」(「主よ、永遠の安息を彼に与え、絶えざる光を彼に与えたまえ」)<sup>23</sup>。これは、死者のためのミサの入祭唱の冒頭の交唱である。この部分は、「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」の第五連の「ミサとみなした、／ファンファーレとみなした／水兵たちの讃歌よ」という詩行における「水兵たちの讃歌」と対応している。したがって、水兵たちが歌い手となり、死したナポレオンをフランスへと導きながら、弔意を捧げているのである。また、この「讃歌」は、第九連で「声を揃えて歌う私たちの私たちの別れの歌」と表現されていることから、この詩の語り手である「私」も

<sup>23</sup> CE. P., t. II, p. 804. (ただし、入祭唱の冒頭では「彼」(ei)ではなく、「彼ら」(eis)となっている。)

「水夫たち」と心を寄せ合い、ともに歌っていることがわかるのである。

このように、「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」もまた、「柳」と同様に、聖母マリアに捧げられた礼拝堂を介して、デボルド・ヴァルモールのカトリック信仰が表現されているように見える。それでは、この詩篇における聖母マリアとはどのような存在なのであろうか。詩の語り手である「私」は第五連で「私たちが灯台とみなした／ノートル＝ダム＝デ＝フロよ」と呼びかけており、この礼拝堂を、海を照らし、陸地へと向かう船の道しるべである「灯台」に見立てている。先に述べたとおり、ノートル＝ダム＝デ＝フロは、水夫や航海者が海上での加護を求める場である。つまり、この詩篇における聖母マリアはナポレオンの遺骸を運ぶ水夫たちの行く手を照らす役割を担っている。ここから想起されるのは、「ステラ・マリス」と形容される、海上の人々の身を守り、無事に陸地へと届ける道しるべとしての「海の星」の聖母マリアである。デボルド＝ヴァルモールは、この詩篇においては、ナポレオンの遺骸が無事にフランスへ帰還するよう、水兵たちとともに歌い、聖母マリアに祈りを捧げているのである。

### 3.2 聖ヘレナとナポレオンの表象

ここまで見てきたように、「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」は「柳」と同様に、聖母マリアが登場するという点で共通している。その一方で相違点もある。それは、「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」には聖母マリアとは別の聖なる女性の存在がほめかされている点である。それは、第八連の「名高き聖女」という語によって暗に示されている。

この連で「私」が「さらば」と呼びかけている「名高き聖女」は、第六連の一行目の「では、さらばセント＝ヘレナよ」と同様に、セント＝ヘレナという島それ自体を指していると考えられる。だが、第六連の二行目で「ひとり泣くがいい」という擬人法が用いられていること、そして第八連で「聖女」に見立てられていることを考え合わせると、この島の名前の由来となった「聖ヘレナ」の掛詞であると解釈できる。

聖ヘレナは、二世紀後半から三世紀前半を生きた女性であり、ローマ皇帝として初めてキリスト教を統一したコンスタンティヌス一世（在位306-337年）の母である。この女性は、326年にエルサレムを訪れ、キリストが磔にされたという十字架、

いわゆる「聖十字架」を発見したと言われており<sup>24</sup>、それにより、キリスト教の聖女とされている。ミサ典書によると、聖ヘレナは、9月14日の聖十字架の顕揚の祝日と関わりがある。この祝日の目的は「贖罪の印である十字架の称揚」であり<sup>25</sup>、典礼においては二つの見方を示すものであるとされている。ひとつはキリストを、讃えられた聖なる王とする見方である。そしてもうひとつは、キリストを、受難のむごい苦しみを味わった人間とする見方である。

以上のことを踏まえて、「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」の第八連を再び検討してみよう。「名高き聖女」は、「天のそばで」、すなわち高方で、「彼」と呼ばれる男性の「墓」を「誰の目にも映る」ように支えるという姿で描かれている。仮に名高き聖女を聖ヘレナとするならば、「彼」とは「キリスト」であり、「光り輝く墓」はキリストが磔刑に処された十字架、あるいは十字架が据えられたゴルゴダの丘に見立てられていると解釈できる。もしそうならば、「柳」と同様、デボルド＝ヴァルモールは、この詩篇においてもナポレオンをキリストにたとえているのである。ただし、留意したいのは、デボルド＝ヴァルモールが「墓」(＝十字架)を「光輝く」と形容している点である。先に挙げた聖十字架の顕揚の二つの見方のうち、ここでデボルド＝ヴァルモールが念頭に置いているのは、王としてのキリストを讃える十字架ではないだろうか。そのように考えると、この詩篇で描かれているのは、「偉大な将軍」あるいは「征服者」としてのナポレオンである。

このように、「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」という詩篇は、ナポレオンの遺骸がセント＝ヘレナを離れ、海の星の聖母マリアの加護のもとでフランスに帰還する様子を描いたものである。そして、セント＝ヘレナを擬人化することで、デボルド＝ヴァルモールはナポレオンにキリストの聖性を纏わせ、彼の偉業を照らし出そうと試みていたのである。

<sup>24</sup> ヤコブス・デ・ウォラギネ、『黄金伝説2』、前田敬作、山口裕訳、平凡社ライブラリー、2006年、p. 211。ヤコブスの『黄金伝説』は、聖ヘレナが十字架のほかにも、聖釘やイエスの脇腹を刺したとされる槍、イエスが生まれた際に使用された銅い葉桶のまぐさ、イエスを救世主として礼拝した三博士の遺骸を発見したと伝えている。

<sup>25</sup> *Missel quotidien des fidèles*, par l'abbé Daniel Joly, Clovis, 2016, p. 1600.

#### 4. 終わりに

以上のように、「柳」と「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」の読解をつうじてわかるのは、次の点である。まず、ナポレオン自身がおこなったのと同様に、デボルド＝ヴァルモールもナポレオンを聖母マリアと強く結びつけている、ということである。聖母マリアは、「柳」においては、詩の語り手である「私」がナポレオンに哀悼の意を込めてレクイエムを捧げる際に、模範となり、力を与えるひとりのおとめとして姿を見せる。また、「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」においては、聖母マリアの名を冠した礼拝堂を、ナポレオンの遺骸を運ぶ船の行く手を照らす灯台に見立てることで、陸地まで導く海の星の聖母マリア、ステラ・マリスとして現れている。このように、ナポレオンの帰還という政治的な出来事を主題にした詩篇は、マリアへの崇敬が詩の支柱となっているという点で、第二節で言及したりヨン暴動を描いた詩群の延長線上に位置づけられるのである。また、「柳」において、ナポレオンの死を嘆く私が、ピエタを想起させる息子を亡くした母として描かれる点は、デボルド＝ヴァルモールがベルギー独立運動を題材とした「ベルギーの十字架の下で」とも共通している<sup>26</sup>。これらのことから、「柳」は、それ以前に書かれたデボルド＝ヴァルモールの政治詩の特徴が凝縮されている詩篇であるとも言えるだろう。

その一方で、ナポレオンを描く際にたとえとして用いられた「キリスト」の表象は、「柳」および「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」以前の政治詩には見られないものである。もとよりデボルド＝ヴァルモール作品のなかで、「キリスト」という語そのものが用いられている詩篇はさほど多くないため、それ自体は大きな意味を持たない可能性もある。だが、この語が、彼女が後半生に刊行した『哀れな花』、『花束と祈り』に多く見られること、さらに言えば、それらの詩篇に描かれているのが、「柳」や「ノートル＝ダム＝デ＝フロ」と同様に、十字架の上の死を喚起するキリストであることは一考に値するだろう。なかでも本論と最も結びつきが強いと思われるのが、1848年の二月革命を主題とした詩篇「監獄と祈り」である。この詩篇については、稿を改めて論じることとする。

<sup>26</sup> 「ベルギーの十字架の下で」については以下の論考で分析した。cf. 岡部杏子、「デボルド＝ヴァルモールにおける隣人愛」、『研究年報』第59号、学習院大学、2012年、pp. 26-32。

